

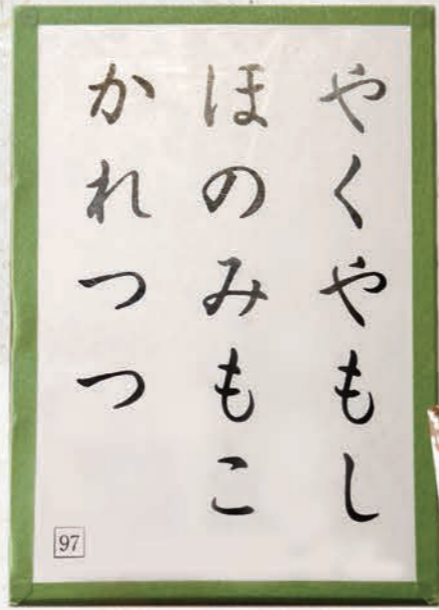


日高美月さん
「体育は好きですが、学校の勉強はあまり得意でないです。でも、かるたはこれからも頑張りたい」

同年代には決して負けないように
もっと上を目指していききたい



(上)札の配置を覚える美月さん。頭のなかではどんな色やイメージが巡っているのだろう(右)母の日高沙幸さんは、いつも美月さんをやさしく見守っている



言中納言定家が詠んだ「菜ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」は、美月さんが東海大会で優勝を決めた札



美月さんが練習に使っている百人一首の取り札

「ちはやふる」のマンガやアニメ、映画が火付け役となり、「一躍注目を集めた」競技かるた。学校の部活動なども含めると、かるた人口は約100万人とも言われ、競技大会も盛んだ。瀬戸市にも競技かるたの世界に魅了された小学生がいる。

「巻頭特集」かるた少女 日高美月さん

目前のB級昇段を 目指して稽古に励む



15分間の暗記時間のうち、13分を過ぎると素振りをして覚えながら、試合への集中を高めている

末っ子の甘え気質から
負けず嫌いの顔が覗く

瀬戸市立長根小学校5年生の日高美月さん。短期間で腕を上達させ、多くの競技大会で上位に入る、期待の競技かるた選手だ。「男女、年齢に関係なく楽しんで、競い合えるのが、かるたの魅力」と話す。

美月さんが競技かるたを始めたのは3年生のとき。授業で百人一首の「散らし取り」が行われた際、ほとんど札を取ることができず、大負けしたことがきっかけだった。散らし取りとは「坊主めぐり」と並ぶ百人一首の遊び方で、普通のかかるた取りと同じく、読まれた札(上の句)の取り札(下の句)を取り合う。帰宅後、母の沙幸さんに負けた悔しさを伝え、かるたが強くなりたいと訴えた。当時、自宅には百人一首がなく、また瀬戸市にかるたを学べる場がなかった。曾祖母の家にあった百人一首をもらい受け、愛知県からた協会の練習会が豊田市で開かれていることを調べて入会した。以後、美月さんは毎週土曜日に豊田市まで練習に通っている。

「4人兄弟の末っ子で、姉や兄とは少し年が離れていますので、トランプなどのゲームをしても、姉たちが常に美月を勝たせていました。普段も甘えっ子のなごりばかりが見えていたのですが、そんな負けず嫌いの二面があったとは、そのとき初めて知りました」と沙幸さんは振り返る。

取り札の位置の暗記は
独特の感覚を生かして

競技かるたは1対1で行われる。百人一首の下の句が書かれた100枚の中から、互いに25枚ずつを自陣に並べ、計50枚で競う。敵陣の札を取った場合は、自陣の札を1枚、相手に渡していく。自陣の札がなくなったほうが勝利となる。並べない残りの札50枚を「空札」といい、読まれることもあるので、「おてつき」などに気をつける必要がある。

勝つための要素はいろいろあるが、まずは並べられた50枚の札の句と位置を、正確に覚える記憶力が大切だ。札を並べ終えたあと、15分間の暗記時間が与えられる。暗記方法は人によってさまざまで、なかには写真記憶といって、札の配置を一枚の画像として頭に焼き付けるように覚えてしまう人もいる。

美月さんの覚え方も個性的だ。文字に色を感じたり、音に色を感じたりする共感覚者のように、札に色が見えてくるという。もともと句として捉えるのではなく、文字列を1つの形として覚えていた。それがいつしか、札に色を見るようになり、色の配置でも暗記をし始めた。さらには、猿



第26回全国競技かるた奈良大会(2017年2月19日開催)の様子。美月さんは初心者ながらも、E3級の部に出場して3位に入った



第71回全国競技かるた福井大会でD3級で準優勝し、初段への昇段を決めた。免許を手にしながら「もっと上を目指していきたい」と強い思いを話す美月さん。そして右にあるのはこれまでに獲得してきたトロフィーや盾の一部

丸大夫の「奥山に紅葉踏みわけ鳴く鹿の声きく時ぞ秋は悲しき」の歌では、取り札で鹿が鳴いているように感じるそう。そんなふうなイメージが呼びかけてくる札もあると話す。「10分間あれば、50枚の配置をほぼ覚えられます。でも競技大会で勝ち上がっていくと、疲れも出てきて、頭のなかで前の対戦の配置と混ざってしまうことも」と美月さん。

夢は大きく、目指すは
かるたクイーンと語る

毎週土曜日の練習会に参加のほか、美月さんは毎朝、ストレッチと筋トレ、素振り、札流しを日課としている。大会では男性や年上、体格に勝る相手とも対戦しなくはない。けりわが恋はものや思ふと人の問ふまで」は、文屋朝康の「白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける」があるため、前者「しらの」、後者は「しら」の2字決まりだ。最長6字決まりの歌が6首ある。現在、美月さんはC級の初段。先日、全国競技かるた信州大会で3位以内に入れば、B級2段への昇段が決まっていたが、残念ながら結果は4位と果たせなかった。将来の夢は、女流かるたの最高峰「クイーン」と語る美月さん。かつては1回戦で負けて会場で大泣きしたこともあったが、今は悔しさをにじませながらも、次の大会を見据えるまでに成長した。同年代のライバルには負けたくないという思いも強く、まずは昇段を目標に、日々練習に励んでいる。

普段は愛らしい美月さんも、かるたに対するときは表情もキリッとする

